西米良村での大学生イベントと青年期の自己形成

―― アクティブラーニングと対置する「深い学び」の実践 ――

山　田　　誠

要　旨

本稿では学生団体の開く「九州まちづくり」を素材に用いて，大学改革をめぐる諸議論と今日的日本における自己形成の課題との関連性を検討する。

実社会に出て通用するだけの自己形成を遂げていない大学卒業生の増大が関心を呼んでいる。この社会の声を受けて，国は2010年代に大学を中心に一連の教育改革を実施している。しかしながら，学習時間を尺度にして調べると，大学生が勉学に取り組む意欲を増大させている様子は見られない。この時，専門スキルの習得に傾斜する正課授業という大学環境にあって，サークル活動は，大学生からみて楽しい大学生活を経験できる場としての期待がかかる。しかるに，調べてみると，参加者の多くは，不満や悩みを抱えながら活動しているのが実態である。

他方では，九州の大学を中心にして自発的に集まる大学生たちは，主に個別大学の枠内に限定され，しかも多くの制約を抱える日常の大学社会から飛び出して，イベント「九州まちづくり」を開く。例年，運営委員たちの企画アイデアを持ち寄ってイベントが実施さる。2021年は西米良に居る語り部の力を借りて，子供たちと絵本をつくるプログラムであった。この取り組みは，大学生にとって自己形成の場となっている。なによりも，「失敗の自由」と向き合いながら即興で運営される大学生のイベントは，個人を点数で評価する大学の教育改革と基本的な性格が異なる。

目　次

1．課題の設定

2．2021年の大学生イベント「絵本づくり」と西米良村の住民

3．受け身の大学生と教育改革の諸相

　1）大学のアクティブラーニング論と教育改革をめぐる議論

　2）大学生活の満足度とサークル集団に対する愛着

4．信頼の社会に迎えられる大学生と開かれた住民の心

　1）大学発の教育プロジェクトと非認知的スキル重視の学びの理論

　2）過疎村の青年訪問者と受容する人々の相互作用

　3）「九州まちづくり」の展開と運営委員会

5．結び

キーワード：西米良村，九州まちづくり，アクティブラーニング，自己形成，中動態

1．課題の設定

九州の山間の西米良村にあっては，この10年ほど大学生たちによるイベント「九州まちづくり」が行われる。本稿はこのイベント活動を，21世紀に入って全国の大学が実施するアクティブラーニングを核とした教育改革の取り組みと結びつけて考察する。

大学進学率が同世代の５割を超えて久しい。その前後から大学卒業者たちの社会人としての消極的な生活態度が人々の注目を集めている。この事態に対処するべく，中教審は2012年に「質の転換」答申を発表する。それ以前から始まっていた大学の教育改革をめぐる議論は，この答申によって一気に火がつく。大学が担っている３つの機能（科学の最前線の研究を創出し後継者を育てる，職業生活に必要な専門スキルの授業提供，人格的に大人へと成長する自己形成のサポート）のそれぞれにあって，大学生は主要なポジションを占める。それらの内で土台に位置するのは，大人になる直前の青年として，より広い社会に適合的な自己を目ざす自己形成の課題である。この課題に取り組む姿勢が持続的に弱まっていると，さまざまな立場から批判が繰りかえされる。だが，いかにすれば転換が可能となるのか。いくつかの手掛かりがあるとはいえ，問題の核心と事態の打開に向けた道筋探求は，まだ入り口段階にとどまる。

他方で一見，大状況とは無関係であって，短い体験型の旅行に見える西米良の大学生イベントは，実態を調べると，出口の見えない教育改革を考え直す「深い学び」の場となっている。未知の人々と一緒になって課題を遂行しようとすれば，外部訪問者である大学生たちにはどのような態度が求められるか。若い学生たちはプログラム企画を通して，このことを自己体験していく。同時に，即興で「場」に必要な対応行動をとっている自己に気付く。これは正しく自己形成の現場といえる。

大学の教育改革をめぐって多くの努力が注がれたにもかかわらず，この10年を超える大学改革の取り組みは，ほとんど成果を上げていないとのデータも発表されている。反対に，批判され続ける大学生たちが自分たちで回答を見つけ出せているとすれば，なぜ可能なのかは解明に値するテーマである。

検討に際して，本稿が依拠する基本的な立場を提示する。長年，学びをテーマにしてきた教育学者および脳科学者によれば，ヒトは子供であれ大人であれ，異質な信頼できる他者と交わることで，自己の果たす役割を認識していく。この自己省察は，明確な目標に向かって能動的に意識を集中させるプログラムよりも，むしろリラックスし，好奇心をもって他者の言動を聞いたり，見守る場合によく起きる。大学生を取り巻く昨今の環境・事態は，この中動態と呼ばれる状態の経験機会を著しく減らしている。この事態認識が本稿のベースとなっている。

そのうえで，本稿が深掘りを試みるのは，十分に自己形成を遂げていないと批判される大学生が自分たちで形成の場を創出している活動空間である。そのために重要となるのは，小さくはあるが貴重なケースの分析に適した理論的装置の発掘である。具体的な実践事例と学術的知見を組み合わせることで，大学生を含めた青年にとっての自己形成課題を前進させるフレームワークが見えてくる。

何はともあれ，問題を抱えながらキャンパスライフを送る大学生たちが，大学から遠く離れた山間の村にやってくる。彼らはそこで，何を

見つけるのか。まずは，イベント現場の観察から始めよう。

２．2021年の大学生イベント「絵本づくり」と西米良村の住民

（ｉ）

「‥‥と申す，カッチン。」語り手役の小学生の声は，語り部の作法を真似しつつも，絵本を仕上げた高揚感から高いトーンになる。西米良村の役場に接する大きな研修所にわずか40人ほどが集まる。３組の子供たちが自分たちで描いた民話の大きな画面を見せながら発表し終えるたびに，盛大な拍手が湧きおこる。各組の発表の後に，大学生が「絵本づくり」で力を入れた個所や，子供たちへの手助けから気づいた点などを手短に述べる。今回，人々の前に現れる大学生の姿は，この短い報告だけである。

前回までと比べて，九州各地から集まったイベント参加の大学生は，今回の場合，３県に所在する５つの大学に範囲が狭まった。新型コロナに配慮した結果，参加者の総数は13人で，イベントの実施期間も実質２日間に短縮された。当然，プログラムが表す時間スケジュールも厳しい。初日の午後に，バスに乗って民話の生まれた現場に出かけ，語り部さんたちから民話を聞く。研修所に戻ると，班ごとに分かれて，先ほど聞いたいくつかの話の内から，どの物語を絵本の題材にするかを，子どもたちで話し合って決める。

２日目になると，10枚の絵に描くシーンを決める。それと並行して，それぞれの画面の構成も定めないといけない。この局面における大学生の担当は，描くシーンに合わせて発表向けの語りを選び，流れのある文章を作成することである。これらを，個性や好みが違うばかりか，学年も異なる班メンバーで意見を出し合いながら，作り上げていくことになる。たくさんの要素が入り混じっている状況にあって，即興のまとめ役を演じるのが大学生の役割である。

選ばれた民話は，次の３つである。イ）祝宴用の物品を貸してくれる女性が洞窟に住んでいたが，誰一人，顔を見たことはなかった。ある日，１人の男性が顔を見ようと出かけると，女性はいなくなってしまい，時折，鶏の鳴き声のみが聞こえてくるようになった話。ロ）漆を採取して暮らしていた兄弟が互いに漆を取られまいと，漆を川奥の渕に隠して木彫りの龍を沈めておくと，なんとそれが本物の龍になってしまう。兄弟はこのままでは駄目だと反省して，採取した漆を分け合って仲良く暮らすようになった話。ハ）「水が飲みたい」と求めた親を見殺しにしてしまった子どもは，やがて自分が真っ赤な鳥（赤ショウビン）に変身してしまう。その結果，水が飲めなくなってしまった話。発表会での子供たちの様子は，自慢できる作品に仕上げられたとの自信にあふれ，しっかりとした声で読み上げ，得意そうな表情であった。

大学生たちにとっては，どれも初めて耳にする民話ばかりである。語り部たちはといえば，久しぶりの語りの機会であり，大学生たちが聞き手だということで大いに気合が入っている。現場に出かけて情景を見ながら，本気モードの話を聞く大学生からすると，じゅうぶんに非日常の体験である。その半面で，社会的な脈絡にも注意が拡がり，民話が単なる昔話でなくて，円滑な社会生活にとって大切な事柄を子供に納得させるしつけの性格もあると了解される。

いくつかの目新しさのうちで，大学生に特に新鮮だったのは，高齢者が中心の語り部と小学生たちの心理的な距離の近さである。お互いの

親密さを読み取れるやり取りからは，年齢的には大きな開きがあろうとも，大学生たちとの間には欠けている価値観の共有が両者の間に見いだせる。したがって，彼らの間には同じ地域に住むヒトとしてのコミュニケーションが成立する。その基盤のない大学生たちが，子供たちに自己のアイデア・見方を説得的に伝えるためには，大学内での仲間口調とは違った表現の工夫が要求されていると自己了解していく。そこから，心理的な距離を縮めるべく積極的に一緒のあそびに興じるなどの方略が採用される。この点については，現地に同行した役場職員のA氏も気付いている。「大学生と子供たちは移動のあい間に手をつないだり，鬼ごっこをしたりで，いつの間にか打ち解ける関係ができ上がっていた。」（A氏のメール，2021年12月22日）ここからは，初日スタートの移動プログラムを手始めに，大学生が「絵本づくり」のファシリテーター役に就く環境が出来上がっていくプロセスが見えてくる。

視点を移し，同じ事態が地元側にもたらす意味に着目してみよう。この村の場合，学校教育において語り部から民話を聞く授業が組み込まれている。とはいえ，学校の外だと子供たちは笑ったり，声を出したりがのびのびとできる。そこに，少し遠足気分も加わる。だから，語り部の話しぶりに対する子供たちのリアクションは大きくなる。すると，同席する大学生たちも自然と同調して，くすくす笑いが次第にはっきりした笑いに変わったりする。それを受けて，語り部たちも高いテンションで話す。語り部にとっても現地で話す機会は珍しい。大学生たちにうまく伝えたいと，自分の内部でイメージを膨らませるなど気持ちが大いに高まったと，A氏に話す（A氏のメール，2021年12月22日）。

（ⅱ）

イベントが開かれた地は，宮崎県境にあって山々に囲まれた西米良村。「秘境観光の定番スポット」として知られる人口一千人ほどの小さな村である（『朝日新聞』2021年11月26日付け）。非都市部で育った者がいない参加大学生にとっても，未知の世界である。そこを舞台にして，イベント「絵本づくり」を企画・運営するのは，主に九州の大学に通う大学生たちでつくる団体「九州まちづくり」である。大学は一切関係していいない。一定の資金を援助するのは，民間のコンサルタンツ会社でつくる協会の九州支部であり，地元の住民たちとの間をつなぐ役は，村役場が引き受けている。

このイベントに参加する学生の期待はどこにあるのか。2年生時に参加していて，今回は準備の最終盤で声をかけられて運営委員になった福永昌俊氏に質問を投げかけた。私の想定する心が動く諸要素を列挙し，一般参加の大学生になった気分で優先順位をつけてもらった。その結果を見ると，1．一種の遠足（非日常の行事，グループでの遠出，未知の世界），2．他大学の学生との交流，3．村民との交流，4．協働で形あるものを産み出す作業（学生同士，村の住民），5．未経験の事業・活動遂行に対する達成感，6．村の活性化への貢献，という順位であった（福永昌俊氏のメール，2021年12月28日付）。

この順位付けに現れているごとく，一般の参加大学生にとって別な大学の人たちと情報交換し，知り合いになることは，優先度が高い。しかるに，それに充てる時間がとても少なかった今回は，大きな不満要因になるはずである。もちろん，事後アンケートにその一端は表明されている。けれども，全体としてみれば，今次イ

ベントに対して肯定的である。そして，初見である地元の人たちとの交流が「楽しくて，素敵な思い出」となったので，次回もぜひ参加したいとの意見は複数みられる（運営委員でない大学生への事後アンケート）。

他方で，以前に参加経験のある者が多い運営委員に就くモチベーションは，一般の学生の場合とははっきり違っている。それは自分たちが編み出す企画で，一般の参加大学生にどれだけ大きな満足感を覚えさせられるか，である。それに向けた準備は，すでに前年度の終わりの３月９日からはじまっている。運営委員同士のミーティングは月に１～２度開き，７月と10月には一泊行程で現地の事前調査に出かけている。その上に，コンサルタンツ協会支部および西米良役場との打ち合わせも加わる。これだけの準備作業は，大部分が４年生ということもあって，就職活動や本格化し始める卒業研究の合間をぬって行われる。今回の企画案には，北九州でNPOの活動に参画している竹本梨乃氏の活動に裏打ちされた意見が強く影響している（竹本氏のメール，2022年１月22日）。

実は21世紀に入ってから，ここでの「九州まちづくり」と類似する手法の授業が，少なくない大学で実施されている。それは大学における教育改革の一環として，自己形成の課題に対する意欲がしだいに低下する事態への対応によるものである。とはいえ，国の教育改革は，現行教育の体質を掘り下げはしないし，また，大学生たちが自己の殻を抜け出していく要件や状況を十分に検討していない。本章が着目する事象と関連づければ，異質な社会における即興のパフォーマンスが自己形成に与える影響は視野にない。次章では，実施されている教育改革を取り上げた諸論稿を吟味し，研究者が寄せる関心の所在を探る。

３．受け身の大学生と教育改革の諸相

１）大学のアクティブラーニング論と教育改革をめぐる議論

（ｉ）

「この10年間の文部科学省施策の成果は上がっていない。」溝上慎一氏が2018年９月25日に日本記者クラブで行った見解発表のインパクトは小さくない。2012年に中教審が「質の転換」答申を出すずっと以前から，彼は青年期にある大学生の資質・能力面における成長課題を具体的な事象レベルでとらえ，実践的な提案を繰り返している（多くの教育論者がアイデンティティや自己形成と表現する問題領域について，溝上氏は青年の成長，より具体的には企業社会へのトランジッションの課題と言い換える）。

文科省の打ち出す政策のみならず，今日まで続く全国の大学による改革取り組みについても，結果として無駄な努力だとの見方を打ち出す彼の発言の背後には，実態調査『大学生白書2018』の調査データがある。それだけに，彼の発言に対して批判するのは容易でない。その議論内容の検討に立ち入る前に，大学関係者以外にはあまり見えていない大学改革をめぐる事態について，簡略に情報と状況を共有しよう。

今次の大学改革をめぐっては，当然のことながら，さまざまなアプローチからの議論が存在する。それを推進させた大きな要素に，大学卒業者が社会生活面で何かにつけて消極的であり，新しい課題に取り組む意欲が弱いとする産業界からの不満がある。もっとも，それは，大学で教えている教員の多くも共有している。例えば，竹内謙彰氏は，「学びに対する意欲は，

以前と比べて低下してきて‥‥，自発的に何かを学ぼうとする姿勢がかなり弱くなってきた」と書く（竹内，2020，１ページ）。

憂える事態に対処するべく，大学教育の「質の転換」を目ざした答申が出された。そこでは，従来からの一方向的な講義形式の教育とは違って，学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称がアクティブラーニングと呼ばれている。これを受けて，全国の大学，大学教員たちはそれぞれのやり方で，授業に工夫を取り入れていく。

多くの研究者たちは種々のアプローチを用いて発言する。多種多様な議論が乱立する状態にあって，溝上氏の立場と主張は明瞭である。「検索型の知識基盤社会」に移行した今日，青年期にある大学生が教育の場で身につけるべきは，「汎用的能力」（溝上，2014年，42ページ）である。他方，2007年から2016年の間で調べてみると，能動的な学修を目ざすアクティブラーニングに参加した学生は一定の割合で増大している。それにもかかわらず，授業に関係する教室外での学習時間は2013年と比べて，2016年には減少さえしている。授業に関係しない自主的な勉強時間も増えていない。つまりは「この20年間の大学の取り組みがほとんど機能していない」と結論づける。そのうえ，小岩井忠道氏によれば，大学生自身が「問題解決能力」，「リーダーシップ能力」は大学生活の間に向上したとは言えないと，溝上氏の見解に同意を与えている（小岩井，2018年10月３日）。

実は，これまで大学が担ってきた３つの機能のうち，１機能だけに焦点を当てた溝上氏の主張は，大学生に内在する成長の資質が能力を決定するという線形的な因果論を内包している。彼のシャープで明快な立論は，絞り込んだ課題設定，計測可能な評価尺度による判断，さらに背後にある方法論といった多次元的レベルで，大学の研究者からの少なくない批判にさらされる。

（ⅱ）

溝上氏はアクティブラーニングが主要な力を注ぐ対象として，急激に「探索型の知識基盤社会」への移行が進む今日，情報・知識リテラシーを提案する（溝上，2014（a），51ページ）。そこでは多くの教育学者が主体性，自己形成といった抽象のレベルで論じる「大人になれない青年・大学生たち」の問題を，具体的に目に見える課題へと落とし込み，さらに学習時間という測定可能な次元へと絞り込んでいく。これによって，教育改革の論点を一般の人々にも分かる生々しいテーマにした。その半面で，切り落とされる面が多々出てくることは避けられない。

溝上氏のアプローチに対する異論を提起する一つの典型例として，河井亨氏の見解を挙げることができよう。彼は，深い理解に到達するには「学習方略やメタ認知や自己調整といった認知活動が重要になる」と主張する。そして，「研究と教育機能を併せ持つ高等教育においてこそ……アイデンティティ形成につながる……深い学びを産み出す教授の実践」を提案する（河井，2019，18，21ページ）。ここから学習と教授（インストラクション），および専門スキルの学習と未解決の課題を探求する態度習得およびアイデンティティ形成といった大学の包括的な教育機能を再提示する。

これと重なり合う局面で，谷冬彦氏は自己形成の定義に関して注目すべき見解を述べている。心理の分野でよく用いられる漠然とした規

定，すなわち「理想的自己に対する志向性」を，彼は支持する。さらに，提唱者であるErikson を踏襲して，彼自身は「斉一性，連続性を持った主観的な自分自身が周りから見られている社会的自分と一致するという感覚」と定義する（谷，2013，208ページ）。ここには，自己形成が明確に周りの社会との位置関係でとらえられている。とはいえ，河井氏や谷氏の論考は興味ある論点を提出はしても，具体的に実践していく組織・制度が将来の課題に先延ばしされるという根本的な弱点を抱えている。（河井，2019，22ページ）。

他の論者からの溝上氏に対する水と油のような対論提示とは異なる切り口で，竹内氏は「現実の教育システム内に限定させる」ことなく，「できうる限り広い射程」を設定して，深い学びを実現する現実的な方向性を探る。その検討を経て，どのレベルにも共通する条件は，「学びへのモチベーション」であって，それを引き出すためには，学びの演出者としての教員の力量形成がとりわけ重要だの見解に達する（竹内，2020，4，15ページ）。果たしてそうであろうか。彼の考察には，専門分野の知見のみならず，卒業にかかわる権限をも保持する教員と，彼らに認定される立場の大学生の上下関係が一切抜け落ちている。これと関連して，真正面から切り込んではいないものの，企業社会と対比しつつ大学のもつ客観的な特質を冷静に突くのは，25年間企業で働いたのちに大学教員になった宮武久佳氏，つまり，外側からの目線で大学を眺めることのできる人物である。

彼の目から見ると，「大学と社会はまるで別世界」であって，会社の世界は，もっぱら会社と会社の企業間で競争が行われ，その競争に勝つために企業レベルでは一つの生命体のようにまとまって団体戦を展開する。それに対し，大学を含めて学校は生徒を「常に比べて評価する」場であり，基本的には個人の能力を点数で評価する個人プレーの世界である。つまり，教育改革を受け止めて授業を「主体的で能動的な」内容にするべくどれほど工夫しようとも，この制度ルールの制約から免れることはできない。

この客観的な視角をもつ彼が見る教員の困難は，点数評価の能力と点数で評価できない集団生活を身に付けさせることのバランスだと述べる（宮武，2021，129～134ページ）。彼の指摘は竹内氏の摘出する問題意識とある面で重なる。この宮武所説を我田引水的に引き取れば，教員パワーを行使することなく，集団生活を身につける場が大学内には存在する。ところが，その場をめぐる諸研究は，教育改革のあり方論議とは分断された状態で展開されている。何かといえば，広義のサークル活動である。

実は，最近までの一般的な大学教員は，集団生活の側面にタッチしなくていい状態が続いてきた。この側面は，大学ではもっぱら大学生たちが自主的に取り組むサークル活動に任せて済ませてきたからである。その一方，大学入学後にいっきょに選択の範囲が広がった大学生たちには，長年にわたり強いられてきた競争のレールから外れて，協働するタイプの活動に加わるチャンスが出現するわけである。この抑制されてきた内発的な欲求の発現とは別に，細かい規制を押し付ける管理者を抜きに，多彩な活動を次々に繰り広げるサークルの様子は，見慣れてきた高校までの生活とは違った雰囲気を醸し魅力的に映る。

2）大学生活の満足度とサークル集団に対する愛着

（ⅰ）

「大学サークル集団とは不思議な団体である。……そこでの経験が社会人となった後も活かされている場合によく遭遇する。」（吉村斉，2015，85ページ）吉村氏が述べるごとく，確かに体育会系などの部活をも含めた広義のサークル集団は，企業社会に適合できる自己を磨く場だとの見方がしばしば聞かれる。だが，それは社会人として活躍している個人の経歴の一部だけを取り上げたに過ぎない。実際にサークルへの加入を企図する大学生の関心はその点にないし，自己形成や教育的な効果も視野には入っているわけでもない。

入手データとしては古いが，加入の実情に批判的な人物（当時，日本大学の学生課長）が実情を紹介している。それによれば，「仲間がたくさんできる」，「先輩・後輩の繋がりができる」が１位，２位を占めていて，教育的な動機は見出せない（栗原，1989，29ページ）。もっとも，栗原氏の批判は一面的であって，宮武氏の指摘を受け止めれば，集団生活を自主的に身につける機会となっているサークルは，大学にとって有用な存在である。なによりも，入学した大学生にとって，最近になるほど，「比べて評価する」正課のシステムから個々人が心理的な距離を保てる小世界は重要になっている。というのも，今日の大学は，安定成長期までの大学とはすっかり様相を変えたからである。その変容ぶりを，学生相談室から大学生の姿を見ている橋本・今村氏が報告する。

少子化によって大学全入の時代が近づいていて，自分の学力に見合った選択をすればどこかの大学に入れる。そして，入学後の大学のあり方は以前と大きく変わっている。高大連携などのおかげで，学業面での連続性への配慮がなされている。問題はその先にある。近年の大学選びでは，資格を取れる大学の人気が高く，そこでは必修の授業も多い。出欠確認は厳格化し，体験型の授業も目立って増えている。かくて，「大学内で過ごす日数や時間が長くなり，」ほぼ同じメンバーと受講し続ける事態が一般化している。これは「高校までと変わらない生活」スタイルであり，その結果，「同級生との人間関係に悩む」学生たちが出現する事態となっている（橋本・今村，2021，53～54ページ）。

この事態を少し歴史的に眺めると，かつての大学には存在したゆとりが奪い去られて，能力を点数で評価する個人プレーの場面がますます顕わになっていくプロセスといえる。例えそうであろうとも，イマの大学生からすれば，高校時代よりは選択肢が広がった環境に合わせて，自分たちなりにゆとりの場を見いだすことが望みとなる。その拠り所となるはずのサークルに加入した大学生たちは，そこでいかなる集団の生活と出会い，正課では得られない自己形成の機会を見出せるのであろうか。

（ⅱ）

もう一度大学に入りたいかと問われて，「年齢や人生経験がさまざまな学生が多い他の国の大学」ならイエス，もっぱら同質な学生が集う日本の大学ならノーだと，すでに大学教員の職にある宮武氏は答える（宮武，2021，126ページ）。そうした大学内で組織されるサークルとその活動展開について，研究者たちは何を考察対象に選び，それらとどう向き合うのだろうか。

同質的な学生が個別大学というかなり閉じら

れた社会を舞台に展開する集団行動は，対社会に開かれていない，大学間の学生交流が少ないなど種々の客観的な制約を抱えている。けれども，それらの側面が研究の対象になることは稀であって，たいていは個人の側からみた心理的なテーマが選ばれる。常に大きな主題は，集団としてのサークルと加入者の距離感であり，また，メンバー間の人間関係もその１つである。近年目立っているのは，企業社会にうまく適合できない大卒生への関心の高さを反映してであろうか，サークル集団と企業組織の近縁性に着目したアプローチが多い。例えば，橋本氏らは，サークル集団が事実上「社会に出るうえでの準備組織」だと位置づける（橋本・唐沢・磯崎，2010，77ページ）。

新井洋輔氏は位置づけの点で，サークルがもつ性格の柔軟さを重視する。集団のフォーマル性とインフォーマル性を対比的に定義する。簡略化していえば，明文化された共通の目的と階層的な地位構造をもち，没個人的に成員を配置するのが前者。後者は個々人の目的を持ち寄った自然発生的な集団であって，比較的自由に行動する。それぞれのサークルはこれら両端の間で連続的な移行状態にあると位置付ける。このフレームで先輩と後輩の関係を分析すると，３種類のパターンが取り出せる。この分析では，フォーマル性が高いか低いかにより，先輩のもつ意味が異なる点は注目される。（新井，2004，36，45ページ）。

他方，サークルへの愛着を生む要件について，サークル活動のタイプと人間関係の両要素の種々の組み合わせパターンによる差異を調べるのは，橋本・唐沢・磯崎氏の研究である（橋本・唐沢・磯崎，2010，77ページ）。大学生のサークルに加入する最も大きな参加動機（友人や仲間を得る）を重視する研究は，その他にも多い。それらの場合は，たいてい肯定的な態度の側面に分析関心が向く。これに対して，高田治樹氏は対照的に，否定的な態度に着目した分析に従事する。その考察に当たっても，同じく「サークル集団の形態や組織特性」に注意が払われていて，フォーマル性の程度などが大学生のサークルとの心理的な関わり方に違いをもたらすと仮定する。彼の調査からは，サークルに対する愛着を抱く者よりも，ずっと多い割合の大学生が「不満や悩みを抱えながら活動している」事態が取り出される（高田，2014，32，44ページ）。

上記に見られるごとく，サークル活動と参加する大学生について，近年は活発な検討がなされている。多様な手法を投入する諸研究は，同質的な大学生が楽しみや満足感を得られるかどうか，つまり自己実現の側面を検討する点で共通の方向にある。裏返せば，加入する大学生の個人心理ばかりに焦点を当てる研究となっている。

その半面で，現行のサークル活動が抱える客観的な諸制約を取り上げないし，足元で急速に進展する教育改革に占める微妙なポジションも射程に入らない。結果として，社会の側がサークル活動に投げかける好意的な評価に寄りかかった研究状況だと，特定の局面にしか着目しないリスクが高くなる。現在の研究ポジションは，大学生が抱える自己形成の課題とは正面から切り結べていない。

少なくない先行研究に当たってみても，教育改革の包括的な考察とは出合わない。大学の存在と結びついた改革研究であるならば，教育システムの主柱である正課だけでなく，大学生の生活文化の上で重要なサークル活動も検討範囲

に加えることが望まれる。また，改革の内容として，青年期にある大学生の人格的な成長をも視野に入れてくると，専門スキルの習得とともに，自己形成も当然，欠かせないテーマとなる。

ところが，集団生活でコミュケーション能力などが養えるはずのサークル活動も，実情は自己形成の課題どころか，その入り口に当たる他者の言動による気づき，自己への洞察，新たな発想や創造性などの要素（非認知的スキルと呼ばれる）は，主要なテーマとならない。同質的な者同士の日常的コンタクトが支配的な日本の大学に批判的な宮武氏の見解を手がかりにして，この活動のあり様を堀り進めていくと，安定した日常という壁に突き当たる。その壁の向こう側に待っている不安定な世界にこそ，自己形成に向けた道が開かれるというのが，本稿の立場である。

不安定さに満ちた学びの道を進むに際しては，別タイプの案内役が求められる。次章に登場する何人かの研究者のうち代表的な1人は，脳活動の研究者・虫明元氏である。複雑に絡み合う脳内ネットワークを解きほぐし，簡単化のために執行系ネットワー（外界に向かって特定の事項に集中する働き）と基本系ネットワーク（複数の人の心の働きを問う役割など）に大別し，それらの相互作用を種々の場面に合わせ具体的に説明する。彼の説明は，アクティブラーニングが狙う専門スキルと自己形成の課題の相互関連をつかむうえで，極めて有益である。

従前の教育改革研究に登場しない見方でもって，イベント「絵本づくり」もう一度とらえ直すと，何が，どうサークル活動と違っているのかがはっきりと見えてくる。そこに引き出される重要な場面は，安定した大学生活生から離れて，「不安定さ」と向き合う姿である。この不安定さに包まれた「九州まちづくり」は，執行系のネットワーク（専門用語では，セントラル・エグゼクティブ・ネットワーク）を駆使する能動的な学修の次元から，基本系ネットワーク（専門用語では，デフォルト・モード・ネットワーク）に身を任せて挑む非認知的スキル中心の舞台へと大学生たちを導く。

4．信頼の社会に迎えられる大学生と開かれた住民の心

1）大学発の教育プロジェクトと非認知的スキル重視の学びの理論

（ｉ）

「学生達の発言内容や文章表現が深まり，……十分に成長のあとがうかがえた。」（栗原，1989，32ページ）サークル活動を厳しく評価する栗原氏は，日本大学の記念事業である北部パキスタンの「夏季交流大学」事業を高く評価する。その事業は20年前に先取りされた能動的な学びの事例である。

事業は本格的なプロジェクトであり，当時としては新機軸が盛り込まれていた（栗原，p31）。ミーティングは出発前も，現地でもひんぱんに開かれた。３か月の現地滞在では単独行動が原則で，食事を含めて現地の人々と同じ生活を経験する。現地研修の後にはシンポジュウムを開き，すべてが終了した段階で各人が活動報告を提出する。大学は補助金支給と助言に役割を限定し，教員はファシリテーター（議論の促進役）に徹した。この事業の一部始終に関与した栗原氏は，学生の成長には体験が不可欠だと語る（栗原，1989，31～32ページ）。

ここで，イベント「九州まちづくり」の事業展開を日大の事業と較べてみよう。イベント「絵本づくり」では，出だしとなる活動の仲間

づくりからして，虫明氏が「人間にとって根源的なスキル」と指摘する非認知的スキルが要求される（虫明，2018，iiiページ）。集まってきた大学生の間は当然，同格である。どのシーンを描くかの主導権は，学年の異なる小学生グループにある。もちろん，何を決める際にも集団フォーマル性は通用しない。これまで全く経験したことがない社会環境の下にあって，班全体が１つの作品を作り上げていく。その際に，どうすれば自分なりの意向を反映させられるかが問われる。

その一方，大学生の主観的な参加関心はといえば，自己の成長を狙った教育活動ではないし，過疎の村に対する活性化への全面的な支援でもない。受験勉強を経てようやく入った大学で予想以上にあわただしい学業に追われる日常から一時的に離脱し，リフレッシュすることが中心である。客観的にみた事業の内容・進め方とは別に，事業展開からは自分たちが獲得したいと願っていたリフレッシュ気分を得られたのであろう。大学生の事後アンケートを見れば高評価なっている。

それでは，自己形成という評価尺度に照らす場合，西米良のイベントは上記の日大プロジェクトよりも教育効果が劣るのだろうか。両者を脳（心）科学の脈絡でもって関連付けようとすれば，大学教育の範囲を取り払って，ヒトの学びと長年向き合っている学者たちの知見を取り入れる必要が出てくる。

（ii）

再度，本稿の主要テーマに立ち返れば，青年期にある大学生の自己形成力が低下し，卒業後の社会生活においても消極的な態度が目立つ。しかも事態の打開を目ざして導入するアクティブラーニングも状況を改善できる傾向を示さない。いかにすれば，この事態を打開できるのか，である。この点で，実は大学の教育改革を企図する人々の多くは，ボタンを掛け違いしている恐れがある。主体的で能動的な教育をいくら工夫しても，科学的に見れば，そこから自己形成を高める事態は生まれない。この決定的なミスマッチを白日の下に引きだし，非認知的スキルの大切さを力説するのは，虫明元氏である。

彼によると，脳内ネットワークは複雑に絡み合いながら，さまざまな学びを生じさせる。当面の関心事であるアクティブラーニングは，明瞭な目的の達成に向けて，執行系ネットワークが主体的にかかわる。これと対を成すのが基本系ネットワークであり，いろいろな場面で活躍する脳内のハブ機能を引き受けている。そして，対人関係を介した他者理解，いわゆる社会的認知を学ぶ際にも主に働く。さらに，ヒトのある行動に対する刺激や情報がそのヒトの好きになる対象となり，それが内的動機づけに定着してしまえば，それは非認知的スキルとなる（虫明，2018，14～15，47ページ）。

とはいえ，現実世界では執行系ネットワーク，基本系ネットワーク，さらに４つの学びタイプと関係する気づきネットワークなどが互いに拮抗しあって，理解や了解が進行する。その脳（心）の諸機能をそれぞれ解説する虫明氏の特徴は，具体的シチュエーションに即して何が起きているかを説明する点にある。その彼はさまざまな場面状況のうちで，思考の集中を解き放った状態，ある種の「ぼんやり」感が学びにとって特に重要だと指摘する。

この状態時に活動する基本系ネットワークが創り出す「間」にこそ，「想像性，社会性，即興性，創造性等いろいろな働きがある。」それ

ゆえ，心の注意の範囲を広げる「間」を大切にできれば，「意思の疎通が生まれることも多く」，「人とのネットワークが広がる」ことにもなる（虫明，2018，124ページ）。

上記の所説でいえば，アクティブラーニングで狙う能動的な学びは，「トップダウンで働くリーダーシップ的」な執行系ネットワークと強く結びついている。それに対して「基本系のネットワークは回想記憶，展望記憶などの自己の認識」に関り，「自分の参照点を与える働きがある。」（虫明，2018，122～123ページ）これだけの下準備をして２つの団体活動を対比すると，日大のプロジェクトは，主として執行系ネットワークを用いるのに対して，西米良イベントにおいて大学生が全体的に引き受ける役回りは，どちらかといえば基本系ネットワークが活躍する状況といえよう。

置かれた状況に応じて複雑に変化していく脳の働きの内，主力となっている２つの系ネットワークが取り出せた。とはいえ，それによって，自己形成の問題が解けるわけではない。周りの世界のあちこちから仕入れた情報を，自己の関心のあり様と重ね合わせることで意欲の強弱がどのよう現れるかが，次の課題として浮上する。学びでは執行系ネットワークに代表されるアクティブな脳と，感情，本能，生命の維持などにかかわるパッシブな脳のどちらもが働くと説く汐見氏は，それを学びのステップとして整理する（汐見，2021，133ページ）。

彼によると，学びの入り口となる「知る」ことへの手掛かりは，言葉であり，とりわけ語りの言葉である。その言葉を用いて，他者に次々と質問を投げかけ，他の対象へと関心を広げていき，最後にそれらを一つの体系として繋げた段階にいたると，情報処理の回路が新たに開かれて学びが成就する。この新たな回路を開く「深い学び」は結局のところ，「子供たちが没頭する，熱中する時間をつくる」ことに外ならない。というのも，その際には，彼らの「心の深いところ」がもっともよく動くからであり，言葉の語義を覚えるレベルから出発して，自分なりの意味を見いだす瞬間だからである（汐見，2021，81，94，150，216ページ）。

繰り返せば，周りの世界の出来事や視界に入った対象に向けて自分の関心を動かせること，それらに深い興味や疑問を抱くことは，気づきと呼ばれ，記憶脳，学習脳，社会脳などいろいろに分類される学びの出発点になる。だとすれば，これは，自己の周囲に起きている事態に対する心の応答という点で，前出のパッシブな体験といえる。同時に，自己を取りまく「感じる世界」に対して感覚性が敏感になり，知りたいと意欲する点では積極的な心の動きでもある。この状態は，通常の能動と受動という２分割には当てはまらないため，中動態と呼ばれる。汐見氏は「中動態とは脳（心）の深い部分が活性化している状態で……受動態に近い」と説明する（汐見，2021，137ページ）。これは虫明氏の知見からは，周りの情報を総合的に検討するべく，基本系ネットワークがハブ的な働きをしている状態となる。

上記の説明では，学び現象が生じている際の脳の作動の仕方，それを喚起する周囲との一般的な向きあい方が，ようやく分かった段階である。大学生という特定の社会的ステージにある同格の集団が，未知の人々と出会う場面でお互いの間にどのような事態が生み出されるのか。さらに，そのプロセスを企画する運営委員会は，集団全体の学び活動にとってどのような存在なのか。これらの考察を経た段階で，大学生

が取り組む学びの全体像が見えてくる。

2）過疎村の青年訪問者と受容する人々の相互作用

「自分たちが大学生だからこそ，相手（の高齢者）がいきなり本音で語ってくる。……（複雑な思いが交錯する）家庭内での世代交替の実情をすんなりと詳細に語ってくれる。社会人が地域に入った場合に，そんな事態に出合うことはありえない。」初期の学生イベント立ち上げにかかわった行徳拓宏氏は，自己の調査体験について語る。ここからインタビュー時の行徳氏の関心は，「九州まちづくり」がたどった軌跡を振りかえり，その時々で地元に溶け込む大学生の活動ぶりへと向かう（行徳拓宏，2022年１月５日のインタビュー）。

行徳氏と同じく，地元の人々に迎え入れられる大学生のポジションに着目しながらも，お互いに取り結ぶ交流のなかで生じる住民心理の動きに重心を置くのは，石野由香里氏である。彼女は大学職員として，各種のボランティアに参加する大学生と活動先となる地域の間を仲立ちする職務に従事している。職務での経験を手掛かりに彼女が取りだすのは，成人への過渡期にあって社会的な好奇心も強い大学生がその好奇心のゆえに，人生で初めて出会うシーンや初見の人々が彼らに示す親しさに対する驚きの感情や心理である。そうした彼らの心理は自然な移行でもって中動態を生み出し，それが地域の高齢者や子供たちの側にある種のオープンな態度を喚起させる。

大学生は「社会的・世代的に未熟さを抱える」にもかかわらず，受け入れ住民からは「学生というだけで，驚くほど重宝がられる，喜ばれる。」（石野，2013，3，９ページ）その理由をあれこれ探っていって，彼女もまた宮武氏と同じく，「大人でも子供でもない独特の存在」である大学生のポジションに行きつく（宮武，2021，203ページ）。青年期という人生上の局面とこれまでに経験していないシーンに立ち合う身体状況という両面において，不安定なポジションにいるからこそ，大学生たちは「時には子供の気持ちもわかるし，大人としても話ができる役回り」を担えるとの見方をうちだす。さらに，大学生は地域住民との素の対話では，「よそ者」でありながら，そこに「特別にフラットな対話の場」が出現する。そして，お互いが「一緒に楽しんでくれている状態」に入り込むと，そこでの大学生は「鏡」のような機能を演じることで結果的に，「相手の（能動的な）役割」が自発的に現れてくるのを促進することになる（石野，2013，12，14ページ）。

大学生と住民が築く関係性は，地域貢献を直接の目的に掲げるボランティア活動に限定されるものではない。上記のごとく，ボランティアではなかった行徳氏も同じ事態を経験している。さらに，2021年の大学生イベントにあっても同様な事態が見いだせる。だが，問題はそこにとどまらない。

石野氏の検討は，「よそ者」論における学生ボランティアの位置という特定領域に限定されている。だが，彼女の分析から引き出される見解は，直接の対象範囲を越えて，青年の自己形成論に関する新しいアプローチの手掛かりを与える。というのも，彼女の見方を内容的に検討すれば，青年が社会的な行動をとる際に，地域が抱えている問題点や解決策の的確な提出―アクティブラーニングが追及する主要な能力―までは要求されていない。その逆である。不安定なポジションにある大学生は，「専門家でない

からこそ生み出される（対等な）関係性」を築くことでもって，相手が解決策を「結果的に気づく（気付かされる）プロセス」の触媒役を演じている（石野，2013，5，11ページ）。

とはいえ，石野氏の分析関心は大きくは地元の側に生じる作用に向いていて，その反作用で大学生自身に生じる内省の側面へは及んでいない。対等な対話によって，地元側に起きる変容を認知することで，大学生の心が大きく揺さぶられる。そこから大学生の側に生じる内面心理こそ，汐見氏のいう「深い学び」の端緒であり，「情報処理の回路が新しくできる」ことに外ならない。この時，他者についての学びと同時に，その反作用によって自己の境界を自覚する事態と向きあえば，自己形成のルートが開かれる。

ここで視線を個々の大学生から少し後に引くと，大学生たちを呼び集めて彼らの自己形成の契機を準備する団体「九州まちづくり」の姿が目の前に大きく現れる。その集合体を突き動かすメカニズムのあり様をとらまえることは，残された課題である。

3）「九州まちづくり」の展開と運営委員会

（ｉ）

「２年続けて代表をやり，２年目には前年よりも大きな成果を狙っていた私は，張り切りすぎたと思う。企画についてもっぱら経験のある先輩だけに相談して，出来あがった案をいきなり委員会の場で図った。すると，運営委員たちからは異論や反発が起こり，結局，心に傷を負う羽目になった。」その後も，社会団体で活動するＨ氏は，活動案作りの段階から参加者間での合意を活動の最優先事項にすえている（H氏，2021年12月29日のインタビュー）。

運営委員会の経験は，彼の自己形成の場である側面と同時に，団体運営の難しさを物語っている。例年，西米良でイベントを開催する，そして，地元を巻き込んだ企画を用意する。この２項目だけは，ほぼ合意が成立している。その準備を整えるのは，毎年，新たに構成される運営委員会であり，委員会には代表も存在する。

この委員会グループは，対外的に重たい責任を負う。まず．建設コンサルタンツ協会が出す支援費の受け手である。地元村役場と事前の打ち合わせをあれこれと行い，種々の支援サービスの提供を確保しないかぎり，地元の人々と一緒になって楽しめるイベントにはならない。とはいえ，何よりも大切なのは，宣伝や口コミで集まってくる大学生たちの楽しみたい期待に，企画内容でどれだけ上手く応えられるかである。

委員会には，形にも言葉にもなっていない大学生の心理，それが具体化された願望をどれほど的確にすくい取れるかが問われる。達成すべき目的が事前に定まっているボランティア活動より格段に難しい。というのも，集団としてみた場合，集まった大学生たちはポジションとして同格である。同じことが代表者を持つ委員会にも当てはまる。実際に上記のＨ氏は同格であるメンバーとお互いの意向を論じ合う場を適切に設けなかったために，強い異論と出あった。この時，石野氏に即していえば，自分が鏡の役を引き受けて，周囲の友人たちと対話することが大切である。そこから彼らが納得するプランを見つけ出す。これを繰り返して具体的な内容を定めていくのが，何処にも書かれていないものの，運営委員会としての最大の任務である。

それでは，抽象的な目標だけがあって，それ

以外は具体的な状況に合わせて即興でスムーズに運営することは，どうすれば可能となるのか。この種の活動をうまく展開するメカニズムなどは，そもそも存在するのだろうか。ここで，数多くの生物の集合行動を観察し，行動ルールを探って理論を築いた研究者を呼び出そう。「群れは意識をもつ」との理論を提唱する郡司ペギオ－幸夫氏である。彼の理論が本稿にとって有益であるのは，個人の自由を認めたうえで，その自由な個人の集まる全体（＝群れ）が一まとまりになって目的行動を遂行するからである。彼の学説をごく簡略に紹介する。

郡司氏によれば，群れの内側にいる個々の生き物は自己の自由を保持しつつ，しかもカニによる群れ状態での干潟渡河やムクドリの編隊飛行に見られるごとく，全体としてまとまって目的行動をとる。西米良の大学生たちはわずか13人であるが，立場の上では同格である。その彼らがイベントを円滑に運営できている際の大学生側に視点を限定すれば，個々人の自由と全体的な目的遂行を共存させるという点で，基本的に郡司氏が対象とする群れの行動と同じパターンを取り出せる。

郡司氏の理論構造はシンプルである。移動する群れの中にいる諸個体は，基本的に同格である。そして，各個体は周囲にいる小グループの傾向を把握し，身近な相手の動きを事前に予測し，互に譲り合いながら移動する（「相互予期モデル」）。この時，自分から移動してもよいと思える位置（「可能的遷移」）をどれだけ多く有するかは重要である。というのも，「可能的遷移」の数が多いほど，当然，他個体との重複（つまりは衝突の発生）は生じやすい。その半面，それによって，近在の諸個体の傾向性をより良く知覚するチャンスも大きくなるからである（郡司，2013，158～177ページ）。

この相互予期モデルは，物理的な群れ行動から取り出された。とはいえ，同格の人々が自由意思で集まり，団体行動に向けて気持ちを１つにまとめ上げていく心理的な場面にも妥当する。具体的に「九州まちづくり」に引き付けると，一般の大学生が他の参加した大学生に向ける関心，つまり交流に期待する心理がそれに当たる。さらに，この心理的な側面への応用は，群れを合目的な行動へと牽引していく「中核部隊」との関係でも該当する。

移動していく魚の群れを用いた説明によれば，巨大な魚の形状をとりながら移動する群れは，尾びれに相当する部分が「強相関領域」と呼ばれる。たまたまこのポジションを占めている魚たちの小グループは，他の個体よりも激しく，かつ同時に動く。その諸個体が描く定方向的な行動が，結果的に群れを先導し，全体を特定の行動に導く。この局面の考察で特に重要なのは，「強相関領域」に位置する魚は特定の資質をもつ固定グループではなく，同格の魚がたまたま当該の位置を占めているという点である（郡司，2013，220，234ページ）。「九州まちづくり」でいえば，運営委員は，一般の大学生と同格である。当初は，面白そうなプログラムに魅かれて参加した大学生の間から，活動に興味を持った人だったり，先輩に声をかけられた人たちが就いている。郡司氏は委員ポジションにつく人物の状況を，ダチョウ倶楽部の熱湯コントを例に出して巧みに説明する。

一見意欲のありそうな２人のメンバーにそそのかされて，３番目の人物が入浴希望の手を挙げたとたんに押し出され，まっ先に熱湯に入る羽目にあう（郡司，2013，154～156ページ）。知性や理性を身に付けて生態系の頂点に位置す

るヒトであろうと，同格な立場の者同士が集まって１つの目的をスムーズに遂行している「場」には，このコントが応用できる。つまり，群れをつくる生物のケースと同様に，受動的能動（運営委員会）の役と能動的受動（一般の参加者）の役ができ，本来入れ替わり可能な両者の間には相互作用が生まれる（この入れ替わり可能な同格の者たち間から，「強相関領域」を担うグループが発生し活動を展開する事例については，熊本地震での避難所運営を考察した論考・山田，2022年，を参照）。

「九州まちづくり」の場合，郡司理論に登場する関係表現を用いると，群れに加わる諸個体と「強相関領域」という役割関係は，地元住民と大学生の間で成立するのに加えて，一般の参加大学生と運営委員会の間にも見いだせる複数層の入り組んだ構造となっている。それだけに，異なる対象者に合わせる役回りとなる一般の大学生が納得するだけの企画の立案は難しくなる。

（ⅱ）

参加した大学生が主人公になって楽しめることを評価基準に据えると，2021年のプログラムは偏った内容である。というのも，イベント当日の大学生の出番は少なくて，しかも一見したかぎりでは，彼らが楽しめる要素もほとんどないプログラムである。しかるに，前出の福永氏の目に，2021年イベントは「めちゃくちゃ良かった。」その結果をもたらした要因について，彼なりに指摘している。

まず，参加した大学生が「期待以上に絵本作りに適応してくれた。」とはいえ，より重要なのは企画である。地元のために「何をかしてあげる」内容ではなくて，「一緒につくるという目線」に立ったプログラムだった。その結果，子供たちや語り部さんとの関りが例年より濃く，近くて対等だった」と評価する（福永氏のメール，2021年12月28日）。けれども，このタイプの活動が毎年，実現できるわけではない。この団体の活動が立ち上がった時点まで時計の針を巻きもどせば，その活動スタイルは，今日のアクティブラーニングに近い活動であった。

団体としての「九州まちづくり」は絶えず変化してきたが，歴史的な前身といえる局面がある。工学部土木系の大学院生たちの間には，以前から全国レベルで実施している設計コンペの活動がある。それが足がかりとなって，九州の具体的な地を設定して，授業で習う調査手法を実地で身に付ける事業計画が持ち上がる。その取り組みは同時に，地域資源を発掘して地元に提示するというアイデアをも含んでいた。かくて2011年にイベント「思い出 NAVI」が立ち上がる。その後，2015年には，できるだけ多くの分野の大学生たちの参集を狙って「九州まちづくり」へと改編された。

この改編の背景には，西米良の集落調査で出合った人々（その多くは高齢者）が大学生たちに示す親切な対応ぶりがある。これを経験して，「自分たちにできることで地元の人々の親切に応えたい」という意欲が次第に高まっていく。それゆえ，2015年からは参加対象を文系学生にも拡大すると同時に，イベントの内容が豊富となり，それに伴って実施の期間も長くなる。具体的な事例としては，村の代表的な産品である「ゆず」の収穫を応援する，村の運動会競技に応援参加する，あるいは子供たちと一緒に竹材を使った作品作りを行うなどのプログラムを提示する。

こうした活動ばかりだと，大学生が楽しめる

要素が少なくなる。それゆえ，村内巡りやダッキーを利用した川遊びなども登場する。つまり，地元への貢献と大学生にとっての楽しみの両側面を兼ね備えたプログラムをどう立案するかは，例年，運営委員会の腕の見せどころとなってきた。

2021年のプログラムは，従前の流れから言えば，大学生の出番が少なかった。しかしながら，福永氏は高く評価する。それでは，ほとんどが１・２年生である一般の参加大学生にとって，イベントはどのような認識をもたらしたのか。肝心な点である。事後アンケートから拾い上げよう。まず山間の村への訪問自体がこれまでにない経験である。そして，短い時間ではあれ，「他大学の人との交流を通して，新たな価値観を見つけることができた」ので，大学生にふさわしい新規の気分を味わえたとの声は，複数上がっている。プログラム内容に関しては，現地で会う初めての人々から「喜ばれるし，お互いの間で一体感を感じた」と，表現する。ここでは，地元の人々による積極的な対応ぶりと，それに対する対等な立場からの自己反応についても認知できている。さらに，彼らとのコンタクトを通して，「ここは力を抜いて過ごしていい」場所だと，自己が中動態の状態になれることを肯定的に評価する。また，伝達する言葉や表現を変えるだけで，相手の了解度合いが変化するだけでなく，「相手との関係まで変化する」事態を察知している。つまり，参加大学生たちは，イベントの機会をしっかりと自己形成の場にできている。

（iii）

事後アンケートに表された参加者の体験評価は，案作りの段階でどの程度企図されていたのだろうか。仕掛け側である運営委員会の一人であり，「絵本づくり」の提案者である竹本氏に尋ねた。彼女の提案の中心には，「大学生が現地を見てまわり，その成果を発表するだけではダメな企画」だという明確な位置づけがある。ここには，前回（2019年）プログラムが地元とふれあう交流もなく，「大学生の自己満足」に終わったとする彼女なりの評価が働いている。

その上で打ち出されるこだわり提案の最終目標は，地元の人々の「郷土愛」を育む企画である。それを明白にプログラムの主軸に据えるという意図から，近年のイベントでいつも登場する子供たちを，これまで以上に前へと押しだす。具体的には彼らにイベント成果を発表させるスタイルの採用である。これにふさわしい素材として，西米良の特徴的な伝統である民話を伝える語り部文化が選び取られた（竹本氏のメール，2022年１月21日，27日）。実際，運営委員の竹本氏は地元の価値を大切にし，大学生も一緒になってそれを守る活動を遂行した。

ところで，全国的に展開されているアクティブラーニングの取り組みのなかには，「九州まちづくり」の構成要素を含んだ手法や，さらには中動態を生じさせる試みも現れている（例えば，小林・椛島・木村・花輪：2018，田中：2021，三浦：2020，などの諸論稿）。そうした試みが拡がっていけば「九州まちづくり」へと収斂するのであろうか。私の見解からすれば，手法の面での接近は十分ありうるし，そこで自己形成の機会が生まれることもあろう。けれども，両者の間には決定的な違いが残る。その違いとは「失敗する自由」の有無である。大学の正課として実施されるかぎり，教員は大学生たちの活動をある基準で点数化し評価しなければならない。このレールから降りない以上，良い

授業とは大学生による学びの失敗をできるだけ少なくすることだといえる。

ここで，虫明氏の学説を用いると，脳内に広く分散するネットワーク間で最も高い注意力が喚起されるのは，同じ誤りを繰り返したくないので真剣度が高まる失敗の経験だといえる。他方で，取り組みが前例のないものであれば，失敗の確率は高くなる。だとすれば，非日常の世界についての限られた情報で一年，一年自分たちが出す企画による失敗は，新しい事態への挑戦の証だといえる。この見解は，郡司所説と合致している。彼の見方に即していえば，一般の大学生と同格のポジションでありながら，同時に計画案を練るという関係性の下で作り出される企画は，「場当たり的で一回性」を有する。つまり，この種の企画は，「絶えず維持されるものではない。」（郡司，2013，214～215ページ）

半面，団体「九州まちづくり」は何もかも自前で実施できているわけではない。その存続・運営は周りの社会による手厚い支援があって初めて可能となっている。その客観的な条件を織り込んだとしても，次のことはいえる。「失敗の自由」という不安定さを自らに引き受けて走り続ける「九州まちづくり」は，現下の教育改革と方向からして異なる。

5．結び

本稿では，青年の大学生活全体を統合的に捉えるという観点から，西米良での学生イベントを大学の教育改革及びサークル活動と関連づけて考察した。イベント参加の学生に見られた「深い学び」は，アクティブラーニングが狙う主体的で能動的な「深い学び」とは違うタイプであった。一方は，個別大学から離れて自己形成を高める機会であり，他方は，個人の能力を点数評価する正課の授業を中心に，企業社会に適合できる専門スキルの習得が狙いである。その学びの違いは，最新の脳科学の知見を用いて説明できる。

本稿の考察素材「九州まちづくり」は，山間の村・西米良で例年開かれる小さなイベントである。2021年秋の参加学生は，新型コロナに配慮したこともあって，通常よりも小規模なイベントである。この団体は試行錯誤を重ねながら，大学生自身が最新の脳科学の提示する「新しい学びの形」と整合的な取り組みを実施している。ここには，不安定なポジションにあるからこそ，異質な他者に積極的に反応する大学生たちの態度がはっきりと表れている。

現下の大人たちは社会のあちこちで，昨今の若者が何事にも受け身だとか，新しいことに挑戦しないと，批判の声を浴びせている。そして，教育の専門家は新しい「検索型の知識基盤社会」への適合に必要な専門スキル・「汎用的能力」を身に付ける教育プログラムを提供する。では，それらプログラムは本当に大学生たちにとって挑戦する機会となっているのだろうか。そのきめ細かなプログラムは，これまでの大学をますます多忙な大学へと変えていき，彼らから「ぼんやり」する心のゆとりを奪っている。

確かに未熟な学生たちは危なっかしいし，外部組織との交渉力やコミュニケーション力が弱い。実際，「九州まちづくり」に関係する組織の大人たちは，それらの弱点を分かったうえで，大学生たちを信頼する。自分たちが当てにされていると感じると，大学生たちは心が揺さぶられて，自分たちにできることを手探りしていく。そこから，自己に相応しい役回りを見つけた大学生による即興のパフォーマンスが立ち

現れる。郡司氏いうところの，「可能的遷移」の場所設定と移動してもよい位置の数をふやしていく場面への参入である。この状況は，汐見氏にひきつければ，五感を研ぎ澄まして周りの世界に深く入り込み，中動態にはまってしまった大学生が「自ら学ぶ」姿となる。

山間の小さな村を舞台に即興のパフォーマンスで自己形成する自分を楽しむ大学生たちがいる。その一方，専門スキルを習得させる機能に特化していく大学教育の世界にあっても，アクティブラーニングを取りこんだ授業の実践はなおも広まりつつある。それら工夫された授業のうちには，虫明氏や汐見氏の見解と合致する要素を含むものも少なくない。このアクティブラーニングとイベント「九州まちづくり」は，どちらも大学生が主要な登場者である。だが，空間的にも運営責任の面でも，別種の取り組みとなっている。では，両者の間に何らの脈絡も見いだせないのであろうか。

前出の福永氏は，宮崎大学地域資源創成学部に通う4年生である。この文理融合を唱える学部は個々の授業レベルを越えて，教育システムそのものをアクティブラーニング型に編成した学部である。まさにアクティブラーニング漬けの日々を送ってきた彼が，大学生活を振り返って言うには，「大学の授業は，スポーツ競技において筋力・体力を鍛える基礎トレーニングに当たる。でも，試合に出なければ勝負勘，そして勝負力は身につかない。」彼の的をえた発言を引き取っていえば，2021年の「絵本づくり」は本番の試合に当たる。学生たちはそこから，実業界に通用する「汎用的能力」とは別タイプであって，自己形成の素養が培われる「深い学び」を体得している。

これを学生団体レベルでとらえると，一部のメンバーは重なりつつも，形式的には毎年，新たなメンバーが寄り集まって，新しい企画を遂行する。それゆえ，郡司理論に引きつければ，この集合体は群れそのものとして楽しむ意識が生じている。この参加者たちが感じる即興の高揚感は，個の自己形成とスキルに焦点を合わせる虫明・汐見氏の理論フレームワークからは導けない。個々人の「深い学び」は，それはそれで大切である。だが，参加メンバー全体の間に「楽しむ意識」がどれだけ強く共有されるか。これが事業継続のエネルギー源となっている。

［付記］

本稿の執筆は広範囲にわたる関係者の支援・協力によって，初めて可能となった。卒業を前にして論文作成に追われている大学生の皆さんや，かつてのイベント参加者の方々が寄せてくださった丁寧な回答は，分析材料そのものである。と同時に，白石悦二氏（当時，日本工営福岡支店）による「九州まちづくり」への誘いがなければ，この注目すべき事業との出合いはなかった。記して感謝する。

〈参考文献〉

安達悠子・杉山紗希「大学生の部活・サークルへの所属と活動に対する意識が学校生活満足度に与える影響」『東海学院大学研究年報』4号，p.83–89，2019年。

赤堀侃司「アクティブ・ラーニングに関する意識調査と分析」『教育テスト研究センター年報』2巻，p.8–18，2017年。

新井洋輔「サークル集団における対先輩行動：集団フォーマル性の概念を中心に」『社会心理学研究』20巻1号，p.35–47，2004年。

近田政博・杉野竜美「アクティブラーニング型授業に対する大学生の認識—神戸大学での調査結果か

ら—」『大學教育研究』23号，p.1–19，2015年。
ギル，ジェリー H.『学びへの学習』青木書店，2003年。
郡司ペギオ - 幸夫『群れは意識をもつ—個の自由と集団の秩序』PHP 研究所，2013年。
橋本和幸・今村理恵「学生と教員のパラレルワールド——学生相談は水先案内となりうるか⑦」『書斎の窓』678号，p.53–58，2021年11月。
橋本剛明・唐沢かおり・磯崎三喜年「大学生サークル集団におけるコミットメント・モデル：準組織的集団の観点からの検討」『実験社会心理学研究』50巻1号，p.76–88，2010年。
比留間太白「プロジェクト—日常への関心から出発する越境の説明力の構築」富田英司・田島充士編『大学教育—越境の説明をはぐくむ心理学』ナカニシヤ出版，p.127–143，2014年。
五十嵐敦「大学生の生活行動と社会観や時間的展望との関係—キャリア形成としての大学生活の充実について検討する—」『福島大学人間発達文化学類附属学校臨床支援センター紀要』2号，p.29–36，2020年。
池田満「大学生の学校生活享受感に対するサークル等所属の影響」『応用心理学研究』39巻3号，p.248–249，2014年。
石川勝彦・幸野邦男・長倉富貴「自発的な活動へのコミットはキャリア成熟を促すか」『経営学論集』2号，p.1–11，2021年。
石野由香里「『学生ボランティア』の特異性が地域に対して有する潜在的な機能—ボランティアをする / される関係をズラす効果が地域の場づくりへ与えた影響—」『生活学論叢』23号，p.3–16，2013年。
伊藤忠弘「ボランティア活動の動機の検討」『学習院大学文学部研究年報』58巻，p.35–55，2011年。
金子元久「大学教育と学生の成長」『名古屋高等教育研究』12号，p.211–236，2012年。
河井亨『大学生の学習ダイナミクス—授業内外のラーニング・ブリッジング』東信堂，2014年。
河井亨「経験学習におけるリフレクション再考『行為についてのリフレクション』と『行為の中のリフレクション』の関係性についての考察」『ボランティア学研究』18巻，p.61–72，2018年。
河井亨「アクティブラーニングおよび主体的・対話的で深い学びと学生の成長のあいだにはどのような関係があるのか」『社会システム研究』38号，p.1–27，2019年。
川島啓二「青年の『移行期問題』と大学教育の課題—産学連携教育の可能性の視点から 」『国立教育政策研究所紀要』p.37–44，2006年。
京都大学高等教育開発推進センター / 河合塾編『高大接続の本質』学事出版，2018年。
小林由利子・椛島香代・木村浩則・花輪充「演劇的手法を活用したアクティブ・ラーニングの可能性—保育者養成における授業事例を中心に—」『文京学院大学人間学部研究紀要』19号，p.135–147，2018年。
小口広太「大学と地域の連携活動をめぐる現状と行政の役割に関する一考察—岐阜県中津川市『域学連携事業』を事例として—」『千葉商大論叢』58巻2号，p.181–196，2020年。
小岩井忠道「大学生の資質・能力向上見られず　溝上慎一氏が教育改革の効果否定」，『客観日本』（https://www.keguanjp.com/kgjp_jiaoyu/imgs/2018/10/20181003_1.pdf），2018年10月3日。
国分功一郎『中動態の世界—意志と責任の考古学—』医学書院，2017年。
小山理子・溝上慎一「講義型授業とアクティブラーニング型授業への取り組み方が学習成果に及ぼす影響—短期大学生の調査結果から—」『名古屋高等教育研究』17号，p.101–121，2017年。
栗原満義「サークル活動の現状と課題」『大学と学生』288号，p.29–32，1989年。
九州まちづくりプロジェクト（https://www.kyumachi.com/project-01）。
米谷淳「アクティブラーニングをファシリテートするために必要な教員の資質について考える (1)」『大学教育研究』23号，p.43–53，2015年。
三浦真琴「Active Learning の理論と実践に関する—考察 LA を活用した授業実践報告 (11)」『関西大学高等教育研究』11号，p.1–8，2020年。
宮武久佳『自分を変えたい—殻を破るためのヒント—』岩波書店，2021年。
溝上慎一『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』東信堂，2014年 (a)。
溝上慎一「自己 - 他者の構図からみた越境の説明—アクティブラーニングの潮流に位置づけて」富田英司・田島充士編『大学教育—越境の説明をはぐくむ心理学』ナカニシヤ出版，p.221–230，2014年 (b)。
溝上慎一・山下佳代編『高校・大学から仕事へのトランジッション—変容する能力・アイデンティティと教育—』ナカニシヤ出版，2014年（c）。
溝上慎一『大学生白書2018—いまの大学教育では学生を変えられない—』東信堂，2018年。
虫明元『学ぶ脳—ぼんやりにこそ意味がある—』岩波書店，2018年。
中里陽子・吉村裕子・津曲隆「サービスラーニングの高等教育における位置づけとその教育効果を促進する条件について」『アドミニストレーション』22巻1号，p.164–181，2016年。

小川恒夫・園田由紀子「大学生の主観的生活満足度と自己認知・人間関係・成績—東海大学文学部1年生を対象にして—」『東海大学紀要文化社会学部』2号，p.53–66，2019年。
桜井政成「地域活性化ボランティア教育の深化と発展—サービス・ラーニングの全学的展開を目指して」『立命館高等教育研究』7号，p.21–40，2007年。
新立慶「大学生の『生徒化』論における批判的考察」『教育論叢』53号，p.67–75，2010年。
汐見稔幸『教えから学びへ—教育にとって一番大切なこと—』河出書房新社，2021年。
白井雅人「これからの大学教育に求められる学びの構築—中央教育審議会答申および教育再生会議提言に見る改革の背景と目的—」『上武大学ビジネス情報学部紀要』19巻，p.1–33，2020年。
白井利明『大人へのなりかた—青年心理学の視点から』新日本出版社，2003年。
杉浦岳志・櫻井龍一・杉浦大暉・藤田駿介「大学での学びと社会のつながりに関する考察」『筑波大学キャリア教育学研究』創刊号 p.55–75，2016年。
田島充士「大学における説明の教育とは—『越境の説明』の提案」富田英司・田島充士編『大学教育—越境の説明をはぐくむ心理学』ナカニシヤ出版，p.3–16，2014年。
高田治樹「大学生サークル集団への態度の探索的検討—否定的態度を含めた態度パターンの分類—」『青年心理学研究』26巻1号，p.29–46，2014年。
高田治樹・松井豊「大学生のサークル集団に関する研究動向—新井・松井 (2003) からの研究動向の変化—」『筑波大学心理学研究』43号，p.25–35，2012年。
武内清「学生文化の実態と大学教育」『高等教育研究』11巻，p.7–23，2008年。
竹内謙彰「主体的学びが成立するための条件の探求」『立命館産業社会論集』56巻2号，p.1–20，2020年。
田中優「中動態としての地域指向型 PBL に関する考察」『日本社会福祉大学全学教育センター紀要』9号，p.33–47，2021年3月。
谷冬彦「青年期における自己形成とアイデンティティ形成」『青年心理学研究』24巻2号，p.207–210，2013年。
樽木靖夫・川田裕樹・榊原健太郎・福田八重・大日向浩・馬場千秋「大学生の自己形成モデルの検討」『帝京科学大学紀要』9巻 p.15–23，2013年。
富田英司「越境の説明をはぐくむ教授学習の原理を求めて」富田英司・田島充士編『大学教育—越境の説明をはぐくむ心理学』ナカニシヤ出版，p.231–244，2014年。
渡邊瑛季「若者の社会活動が地域にもたらす効果に関する調査研究」『市政研究うつのみや』14号，p.71–76，2018年。
山田誠「熊本地震における避難所と大学・大学生—計画・マネジメント論から群れの意識へ，そして運営の担い手たち—」『熊本学園大学　経済論集』28巻1～4合併号，p.183–209，2022年3月。
山田剛史「現代大学生における自己形成とアイデンティティ—日常的活動とその文脈の観点から—」『教育心理学研究』52巻4号，p.402–413，2004年。
山田剛史「大学教育の質的転換と学生エンゲージメント」『名古屋高等教育研究』18号，p.155–176，2018年。
吉村斉「大学サークル集団と青年期の発達—高田論文へのコメント—」『青年心理学研究』27巻1号，p.83–86，2015年。
吉村遼子「大人への移行における他世代交流の意義—当別町における社会福祉法人ゆうゆうの事例を参考に—」『社会教育研究』34号，p.63–73，2016年。